

『人類は地球の癌か』を読んで

小城江壮智(詩人)

藤倉一郎 著



小生の従兄弟に幾人かの医師がいて、うち一人は県医師会長を務めた。生真面目で科学偏重の外科医だ。日赤皮膚科部長を経た一人は自分を育んだ地域に少しでも貢献したいと駅前に診療所を開いた。高価な薬を用いずともよい立場で患者の信頼が厚い。これによっても、医者にはさまざまなタイプがあ

るとわかる。思うに、どのような仕事も代価と交換するのだから、それに見合う内容でなければならぬ。即ち、お互いできるだけ真剣に対応すべきだ。それが信頼につながる。人身の安定を生むのだらう。米国発の資本主義経済は一

## 医療従事者からの文明論

### 移植治療などへ疑問を提出

掴みの人間に富を集中、大恐慌を巻き起こす。日本もそのおかげで荒れた世相の体である。安価な労働力と下請けの犠牲の上に成り立つ大企業と、放漫経営の金融を国が支えて国民は疲弊した。ソ連は七十二年かけて崩壊、我国も半世紀を費やし事実上倒産である。

本書はもつと広範囲の人類を対象と

し、最初に「人間ははたして理想的な生物として生きているだろうか」と問う。これは医療従事者の立場からの文明論に他ならない。人とは何かを突き詰めると、生物とは何かに行き着く。このところ「量子、脳、生命」に関する著者の「量子物理学から生命科学へ」なる解説を読んでいる。シュレディン

ガーが生命の本質を「負のエントロピーを食べる」と表現したのを引用、細胞膜近傍のトンネルフォトン凝集体はマックスウェルの悪魔に他ならない」とする。

現代物理においては唯一絶対的な量を光の速度とし、空間と時間は真の存在ではないと強く示唆している。要するに宇宙には人間が関与しているとす。古代インド哲学はそれを色即空、空即是色と独創した。地球上に

生物発生、進化の果てにホモ・サピエンス出現。このようなエントロピー増大に抗する生命体（秩序体）に意志生じて主観的時間を生み出したのは極めて驚異的な現象である。その叡智を發揮すべき人類が地球の秩序を乱し、閉鎖系の環境を食い潰している。

そもそもそれほど「地球は平和」ではなかつたが、ある種の生物は人によつていくつか絶滅、危惧種も多い。先進国が食い荒らした後、発展途上国が爆発的に消費、今や人類を養つに必要な資源は枯渇に瀕している。まさに著者言つところの「地球にとつて癌である」に相当すると肯んじ得ない。

著者は「いまや心の時代に入らなければならぬ」と宣言、「国益だけを考えた民族主義を廃し、地球全体の平等主義をうちたて、成熟期の良好な地球環境を確立」することを提唱する。この「民族主義」はやや一面的と思われるので、エスニシティ（われわれは

を共有する仲間という意識）の立場から考察するのがより妥当と考える。非常に厄介な問題である。9・11事件はその幕開けの象徴とも言える衝撃的なものだった。言つならばもう一つの癌である。

「平等主義」も同様、生物は強者が残る淘汰によつて進化した。人も生物であるから、その本質はさほど変わらなないと考えてよい。ただし、アフリカ先住民についてのマンデラの記述は示唆に富む。彼らは闘争または多数決によらず、徹底した話し合い解決を手段とする成熟社会を持続した。

日本も江戸期には充分安定している。近著『外国人の見た近世日本』は、教科書による刷り込みの認識を訂正してくれる好著である。「成熟」とは必ずしも体制の選択ではなさそつである。むしろ運用の功だろう。そこには進歩とは何かの問題が潜在する。著者は「持続可能追求」を掲げ、「大量生産、大量

廃棄という社会システムと価値観とライフスタイルをやめ、環境保護をモットーとする科学技術の開発を實現させること」と結論する。確かに今は物が豊富で見た目は豊だが、心は満ち足りていない。そこに付け入る宗教にも疑問がある。絶対的存在を崇め、助けを求める安易さに走りたくない和小生は考える。「心」の安定には文化としての何かが必要である。哲学や倫理学は庶民を救わなかつた。学者の目線が違つていたかも知れない。

また、江戸日本は徹底したりサイクルだった。小生の少年時代にも田舎ではゴミがなかつた。流しの排水も溜めて使つた。最近諏訪湖の汚泥の灰には、鉱石より含有量の多い金があるとわかつた。廃棄物を資源とみなす視点が必要である。年中一定の温度を維持しようとするライフスタイルにも目を向けるべきだ。わが家では水道光熱費軽減のためなるべくストーブを用いなかつ

たが、体が適応、人体の順応に感心する。成人病は栄養過多、運動不足が主たる原因。前掲著書に日本人は身分の上下なく粗食だとある。体力も相当だったとある。

著者は「医学の基本は内科治療」と明記、説得力のある記述と思われる。移植治療については「従来の健康をとりもどす医療」との違いを指摘「脳死などというのは尊大以外のなにもでもない」と言い切る。贅成である。小生の伯父が脳出血で倒れたとき、息子の外科医は脳死と判断したらしい。急を聞いて駆けつけて目の上から呼びかけると涙を流した。小生の子どもも四十二歳で意識のない状態と診断されたが、上の子どもに「額を接しなさい」と指示、すると涙が認められた。この二例によっても脳死に疑問が生ずる。心は外見上の意識有無で判断できないと考える。また、「人が自分の生命の主宰者ではない」は見識あることばと思

われる。

長寿は昔権力者の憧れだった。現在日本は長寿社会となつてさまざま問題が発生している。介護保険制度発足で解決すると安易に考えても機能しない。生産に携わらない高齢者だらけで社会は持続不能である。姥捨て伝説は老人の扱いに苦慮した時代背景を窺わせる。老人側はピンピンコロリを念じて寺に参詣した。著者提唱する「老齡期をいかに充実して生きるか」は年齡を問わずに「人生を」とすべきだ。三世代同居の昔は、それなりの伝統を生み、世代交代が自然に行われる傾向だった。現代社会制度と生産体制の変化がそれを壊した。先進国共通の問題である。ここには社会全体の変遷を潤滑にする原則が欠如する。何か新しい哲学が必要だと考える。人間学としての開発である。

「健康とは何か」の項には、「危険を乗り越えて戦い続けるのが人間の法

則」とある。エントロピー増大の法則に則つて納得できる。生物おしなべて闘つて生きる。われわれもただの生きものに過ぎないと達観すべきだ。自然に生きて死ぬのである。パリ語からの翻訳「スツタニバータ」冒頭「蛇の章 一」にいきなり「修業者は、この世とかの世とをともに捨て去る。

蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである」と書かれる。「修業者」を「人」と置き換えてよい。

「ブツダのことは」そのものは現存しない。けれども、その人の雰囲気は感ぜられる。繰り返し述べられる脱皮は解脱と解せられているが、少し違つた。「生と老衰」を恐れるピンギヤに「物質があるが故に、人々が損なわれるのを見るし、……悩まされる」と答えている。「世界を空なりと観ぜよ」は般若心経に見られることばである。量子力学とよく合う思想である。

「死についての断章」に「人間存在

の意味」が困難・悲しみ・悩みから生じてくると述べられる。人は成長期にそれをしつかり認識しなければならぬのが、教育課程に抜け落ちていようだ。人は生涯その追及でなければならぬ。奇跡の存在である生命をいかに用いるかは、個人ごとの課題である。著者は医学教育に「同情と思いやりの情緒教育」不足を指摘する。医学が科学との思い違いは確かだが、同情はカウンセリングを軸とする心理療法からは疑問がある。必要なのは理解と言われている。教育者も医師も、その心得が充分ではない。また、著者の提言「死の教育」は「生の教育」でもある。学校教育や家庭教育に欠ける配慮である。「人はもつと他の動物に死に方を学ぶ必要がある」は実に奥深いことばと思われる。

「医者」の信頼について「は各職業一般に通じる内容だ。冒頭付近で述べたとおり、製図・産業・その他もろもろ

疑惑の渦となった様相だが、その元は商業主義にあると思われる。渋沢栄一は「商業道德第一」と言い、第二以下なしとした。我国には信用という語があつて、それが世界一の老舗数になつた。

アジアモンスーン地帯花綵列島に連綿と続く文化消失の原因はどこにあるか。維新以後の西欧追従、戦後のアメリカ風への羨望が大きく働いたようだ。我々は自国特有の文化創造を図らねばならない。厚労省役人に限らず、みな西欧文献に頼っている構造がある。例えば減反は降水量の少ないヨーロッパには適するが、日本に当てはめるのは間違ひである。縄文弥生時代の方がよほど環境に適した生き方だったと皮肉である。

その点において、「現代社会の精神病理」の「見せかけ文化」は現代の誤謬を鋭く突いていると考える。マスコミも迎合的であつて、正しい報道ではな

い。TVは感覚に直接訴えるからなおさらである。病む社会は作られたもの、その病理の本質がともわかつていとは思えない。

「脳の発育と幼少期の教育」は最も後れた分野への提言と思われる。幼児は親の肌に触れて育つのが望ましい。小生父母兄弟を養つ必要から共稼ぎせざるを得なかった。子どもに多大な犠牲を強いたと反省している。学校も低学年ほど優秀な教員を確保すべきと従来考えていた。年少なほど影響を強く受けるからだ。著者はゴッホの絵を解いて「精神病」と断定、そのとおりと思う。萩原朔太郎も同様である。彼ら进行评估するのは、同等の場にあるからだ。

「文明の凍結」はぎくつとする提言。しかし、何ももつと速く移動しなければならぬ理由はなかると思つし、インターネット万能とも思わない。人には人に適応の速度がある。松尾芭蕉

は歩いて『おくのほそ道』を書き残した。高速道路ではとても無理である。機能満載の携帯電話は多くの問題を派生した。そこに生じたのは個としての存在理由喪失である。著者の「生命の所有権は社会の中にある」は刮目に値することばと感じた。

著者には予防医学を強調する。長野県は割合それに成功しているらしい。先端医療を受け持つ学者タイプには、どつやらそぐわない方向と思われる。小生も無理に延命装置を用いることなく、自然死を全うすればよいと思っている。医学の進歩は生き方のそれななくてはならないだろう。著者の「高察に敬服するところである。」

## もつともな所ばかり

田村 豊幸

寒さと老衰のため「私もいよいよ……」と思っているところへ、藤倉一郎先生の、私も考えていた題名の「人類は地球の癌か」というご本が送られてきた。

あらゆる生物にとつての天敵である人間と想っていた私は、早速とびついた。たしかに人類は地球の“癌”である。

目次の中でも、死が一番気になるので、「死についての断章」から読んだ。

人間は生きること疲れ、何の目的もなくなったとき、死に向かつて消えていくのがいい なるほど、その通りだ。

老人よ立て。延命医療を続けるというナンセンスを医療者も医療を受ける

側も無くするようにしなければならぬ  
い これも、もつともだ。

もつともな所ばかりだ。  
長寿は幸福かという話も、つくづく考えさせられる。

本書は詩が含まれている。詩は日本庭園の中の庭石のようなもので、心を落ち着かせる。

「地球と人間」「移植医」

宇宙まで飛び出していった人間。庭木の移植に近い樹木医のような仕事。若い人の脳に対して、成人の脳に見せる画面の毒性の話

考えさせられることが、沢山書いてある。

本書の「おわりに」人類は生き方を誤っていないか?とある。反省、変化、日本人が一番きらいなことを思わせられる。

もつ少し世に早く出れば、と思わせるところが、にくい。全文、詩である。

近代文藝社  
124ページ  
952円 (税別)